

序に代えて

仏法を求める理由

一 郷 正 道

私たちは、長年、仏教、親鸞聖人の教えを共に聞いてきておりますが、それは何のためなのか、何を教えていたただくのか、はたまたどんなご利益があるのかといえは、次の三点にまとめられるのではないかと最近思うようになりました。

- (1) 私という存在が、縁起的存在であることを知るため。
 - (2) 私という存在が、罪悪深重の身であることを知るため。
 - (3) 私という存在が、死に対する不安と恐怖から解放されるため。
- (1) 縁起的存在とは、私という存在が、時間的空間的に目に見えるもののみならず目に

見えないものを含め、他なるすべてのものとの関係、つながり、かかわりあいの中にしか存在しえないということです。

普段、私たちは、「私の命」「私の人生」と所有格をつけて呼んでおりますが、果たして本当に「私の」といえるのでしょうか。皆さん方は、自分が確かにこの世で生きているということをご自分で実感なさいますか？私は瞬間瞬間の心臓の鼓動、脈拍の音を耳にしたときそれを実感します。ところが、私にとって最も大事な、私の生命中枢機能の「私の心臓の鼓動」であるのに私は自分の心臓を鼓動させることもできないし、だいたい長いこと動きつづけているから少し休ませてやりたいと思っても休ませることはできません。そんなことで維持されているこの命を「私の」などと言っていいのであろうかと素朴な疑問を抱きます。私物化、私有化できないのが「私の命」ではないでしょうか。

そもそも、「私」という存在は、仏教では「五蘊仮和合」の存在と教えられています。物質的存在と感受、表象、意欲、思惟の精神的存在の五つの要素（五蘊）から仮に構成されている存在とされています。したがってそこには永久不変の自我や靈魂といったものは一切認められていません。したがって、私なる存在は、無常にして無我なる存在であるわけです。

仏法を求める理由

このようにさまざまな原因や条件によって構成、成り立っている「私」であれば、「私」という存在は、もともと、制約された不自由な存在であることに気付かれます。そうであれば、「私の命」「私の人生」といっても、もともと、思い通りにならないもの、思い通りにならなくて当たり前のものであるのだ、との受け止め方が可能になります。したがって、私なる存在は、もともと、苦なる存在であるわけです。苦というのは、何か実体的な客観的な事象ではなく、私にとってのものですからきわめて主観的な精神現象であるわけです。同じ癌が私には深刻な苦の対象ですが、ある人にとっては感謝の対象にもなるという事実からも理解できることです。したがって、苦というのは私が作り出しているものであり、私たちは私の「思い通りにならないこと」をみな「苦」にしてしまっているだけなのです。

私は制約された不自由な存在であるとはいえ、私を取り巻くすべての存在——それは目に見えるもののみならず目に見えないものを含め——が、このちっほけな私一人を生かそう、生かそうとして働いていくださることに気が付かざるをえません。そして、そこから自ずと発生する感情は、すべてのものに対する謙虚さと感謝の念であります。昔の人々が「お天道様」と尊敬語をつけて西に没する太陽に頭を下げていた光景、感情を取り戻したいものです。また、違和感を覚えず使用されている「人間が自然を征服する」といった

表現は、現代人の自然に対する酷い傲慢さを表わすなものでもないといえましょう。それに気付いていないことに将来への恐怖と不安を感じるのは私だけではないでしょう。

(2) 『歎異抄』第一条に見える「罪悪深重」という事柄の内容、表現は、親鸞聖人の文献に頻出します。私が深く重い罪や悪を背負った身であるということは、法律上何らかの犯罪を犯した私が深く自己懺悔して発した表現であることにとどまるものではないでしょう。それよりもこの表現は、私が「凡夫」であることを言い当てた言葉であると私は理解しております。

仏教では五悪の一つに「殺生」が掲げられ、「不殺生」が仏教徒として守るべきルールとして示されています。仏教では、生きとしいけるもの、有情とは、人間のみならず、動物の命も植物の命さえも同じ価値を有する存在とみなしています。ところで、私は、自分の命を支えようとしたならば、動物の命も植物の命も奪わずしては一日として生きていけない存在です。私は、毎日、殺生罪を犯している存在です。不殺生せよといわれても殺生せずにはいられない、ルールを守れない存在です。しかも、そういうことに一向に気付こうともせず毎日の生活を送っております。この一事をもってしても、わが身が「罪悪深重」

仏法を求める理由

であることに領かざるを得ません。

他の四悪として偷盜、邪淫、妄語、飲酒が掲げられ、仏教徒の「誡め」とされていきます。「わかっちゃいるけどやめられない」ことばかりで、縁さえあればでかさない自分であることを否定できないでしょう。

そんな私は、まさに、「煩惱成就の凡夫」「煩惱具足の凡夫」としか言わざるを得ない身でありましょう。そして、そんな私であることに無知であることが、「罪悪深重」の身であることに他ならないと思われれます。

「凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむところをおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず」(『一念多念文意』『真宗聖典』五四九頁)

「愛欲の広海に沈没し名利の大山に迷惑し」(信卷、『真宗聖典』二五一頁)

これらの親鸞聖人のお言葉に凡夫の相を教えられます。

(3) 右の如き説明で、「私」という存在がいかなるものか、基本的なあり方を知ることができたとおもいます。すなわち、苦なる存在であり、煩惱まみれの罪悪深重の存在であります。煩惱の根源は無明(無知)であるというのが仏教の通規でありますから、縁起的存在であることに無知な私は、とかく自己中心的な行動に走りがちです。そうであれば自己中心性ということも、凡夫、罪悪深重の内容といえましょう。

さて、人間にとって最大の苦はなんでしょう。死に対する不安と恐怖だと私は理解します。なぜなら、死の到来の時は確言できませんから、それに対する不安と恐怖がまずあります。どんなに大事な人の死であつてもその方の死を代わつてあげれないし、私の死を代わつてもらふこともできません。死は未知の経験不可能な世界です。また、大事な人の死に直面して生ずる辛さ、悲しみ、寂しさは何をもつても癒すことのできぬ深刻なものです。ですから、私は、死に対する不安と恐怖が人間にとって最大の苦であると理解します。そして、その死の到来を、天災、文明災、病氣、交通事故、戦争をはじめとする社会的動乱、孤独等の諸原因によって身近に実感する昨今となっています。

それでは、この生涯苦からどうしたら解放され、克服できるのでしようか? いかにしたら安らかな死をむかえることができるのでしょうか、突然の死に立ち向かう覚悟、準備は

仏法を求める理由

できているのでしょうか、といったことが問われます。そのために厳しい修行等が用意されているのでしょうか。しかし、怠惰な私は、そのような修行に励む体力もなければ、気力も努力の気すらおこらないのです。こんな私にはどんな救済の手がさしのべられているのでしょうか。

1. そこで苦の解消法をたどってみましょう。

・まず、釈尊（BC5～6世紀）は、自力の修行によって自我への執着や煩惱を断ち涅槃を獲得されました。

・死後の極楽往生を説く浄土思想が発生したのはAD100年頃、北西インドにおいてであったとされます。

・『般若経』や龍樹（AD2～3世紀）が生まれ、煩惱即菩提（迷いがそのまま悟り）の教えが広まりました。縁起のゆえにすべてのものに実体性がない（空）わけですから、煩惱も無自性・空、悟りも無自性・空で煩惱即菩提となります。煩惱が空であり幻に過ぎないと悟れば、煩惱はそのまま菩提となるわけです。悟りは煩惱の真只中にあり、別な場所と時間にあるのではないわけです。煩惱と無関係に悟りを追求するのは実体視された悟り

への執着でしかありません。

・非科学的で何かいかがわしい「幻覚」「せん妄」と見做されがちな「お迎え現象」は、実は、安心して死を迎えることのできる、死の準備過程で起こる自然現象として再評価されるべきだとする見解が、医師によって発表されています。

奥野修司『看取り先生の遺言』（文藝春秋 二〇一三年一月）が、岡部健医師（東北大学に実践宗教学講座の開設に尽力され、臨床宗教師の養成を提唱）が宮城、福島両県でおこなった注目すべき調査結果を載せています。それによると、平均年齢74・2歳の人の42・3%がお迎え現象があったと答えています。また、「お迎え」体験をした場所は、「自宅」が87・1%で、「一般病院」は5・2%にとどまっています。

岡部医師は、「住み慣れた自宅には患者を穏やかにする何かがあるのだろう」と言われ、また、「みんな逝き先が見えないから不安なのであって、お迎えがあつて『あの世』という逝き先が見えたら、基本的に落ち着くのである」と理解されておられます。そして、岡部医師自身「それまで、死の瞬間は恐怖と苦痛に満ちているとおもっていたのに、彼らをよく観察してみると、なんだか気持ちよくあの世に逝つてゐることもわかり、『お迎え』は私自身が死を見直すきっかけにもなつた」と告白しておられます。

仏法を求める理由

2. さて、それでは、私の死に対する不安と恐怖の解消法は、親鸞聖人の教えにしたがうだけです。

「この身はいまはとしきわまりてそうらえば、さだめてさきだちて往生しそうらわんずれば、じょうどにてかならずまぢまいらせそうろうべし。」(『末燈鈔』『真宗聖典』六〇七)

「なごりおしくおもえども、娑婆の縁つきて、ちからなくしておわるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきころなきものを、ことにあわれみたまうなり」(『歎異抄』第九条『真宗聖典』六三〇)

これらのお言葉にみられる聖人のご心情とご了解に、付いてゆきたくおもっております。いのちおわるときに還っていくべき世界、待たれてある世界としての浄土へ往くことが保証されているということはなんと有難いことか。それによって安心して現生を送ることができるわけです。浄土があると信ずれば、死に対しての不安感は強く出ないはずで

す。

物理的に空間的に浄土の存在証明がなされない限り、浄土往生など信じられない、というのが現代人の大方の理解でありましょう。私は、「浄土は、必要とする者には有るが必要としない者には無い」という高僧のお考えにしたがいたい。私の存在している世界は、見えるものだけで成り立っているわけではないでしょう。とりわけ宗教の世界は、主観的事実の世界であると理解しております。

なお、浄土の世界、お念仏によってなぜ浄土へ往くことができるのか等、浄土についての大事な教えについては左記書物を熟読されることをお勧めし、私の拙い理解の表明は控えたいと思います。

——二〇一四年二月——

〔参考書〕

山口 益 『大乘としての浄土』理想社 一九六三、一九八八

幡谷 明 『大乘至極の真宗』方丈堂出版 二〇一三